

在宅の最期支えたい

増える高齢単身世帯

単身高齢者が、住み慣れた自宅や地域で知人らに囲まれて最期を迎えられるようにと、NPOや医師らが連携して「在宅みとり」に取り組んでいる。背景には高齢者個人の意思の尊重に加え、病院での受け入れに限界があるという問題もある。

東京都台東区の民家を手を合わせる。を改装した無料・低額 男性は昨年9月に末宿泊所。3月12日の末期の肝臓がんと分かる明、2段ベッドがいくと、一切の治療を断りつも置かれた部屋で、「寂しいからここに居83歳の男性が息を引き させてくれ」と、宿泊所 宿泊所で暮らし、最の支援をするNPO法人「ふるさとの会」さん(62)は車いすを押し 依頼。慣れ親しんだ住したり、買い物代行 まで残りの人生を過したりして頼りにされ ました。

宿泊所の責任者、千代で暮らしながら身内。 葉翼さん(31)は「日常他人じゃない。幸せなの中で自然に迎えた最亡くなり方をした」と期だった。支え合いが話し、ベッドに向かい生まれ、ここで亡くな

NPO・医師ら連携 病床不足も背景に

東京

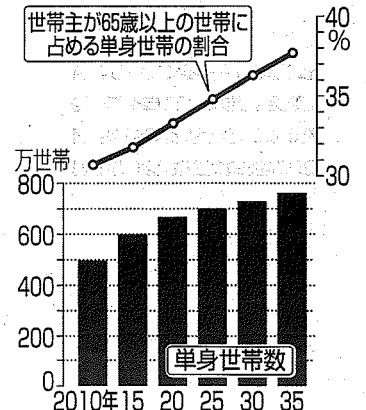


単身高齢者が集まり、アパートでのみとりが報告された「しのぶ会」3月、東京都墨田区の地域生活支援センター「すみだ」

ることに誰も何も言わなかった」と振り返る。会が支援する高齢者の中には、病気になることも延命治療を望まない人もいる。病床不足に悩む病院も多かったと推計。近くに身内が

め、宿泊所でのみとりに取り組むことにし、一昨年以降、末期がんの5人をみとった。国立社会保障・人口問題研究所は、65歳以上の単身世帯が2010年の498万世帯から35年には1・5倍の762万世帯に増え、世帯主が65歳以上の世帯の37・7%を占める

65歳以上の単身世帯の推移



※国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」より

いなくても、在宅で最期を迎えたいと願う単身者も多く、医療機関やNPOなどによる支援体制の整備が求められる。3月末、ふるさとの会が東京都墨田区で開いた「しのぶ会」。末期の大腸がんで1人暮らしだった65歳の男性が昨年11月、アパートで倒れているのを看護師らが発見し、自宅のみとりにつながった経緯が報告された。みとりに駆け付けたケアマネジャーの女性は「痛みのケアだけに亡くなる患者の4割になり病院に居づらかったようだ。最期の言葉は『ありがとう』だった」と話す。訪問診療で男性の体の痛みを緩和していた。いずみホームケア要だ」と話している。